

## 【論文】

## 荒尾精と日本初のビジネススクール・日清貿易研究所の誕生

愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長

藤田 佳久

## 1.はじめに

本稿は1886年（明治19年）、荒尾精（図1）が、初めて清国へ渡り、岸田吟香の協力



図1 日清貿易研究所を設立した荒尾精（左）とそれをサポートした根津一（右）

も得て漢口樂善堂を拠点に3年あまり商店を経営しながら、清国の情報収集も行っており、帰国したあと、1890年（明治23年）、新たに上海で開設にたどり着いた日清貿易研究所への経緯とその性格について検討する。またあわせて、それが日本初、しかも当時の世界においてもほとんど例を見ないビジネススクール誕生への試みの展開であったことを明らかにしようとするところに目的がある。

この日清貿易研究所は、その後の1901年（明治34年）に荒尾精の構想によって同じく上海に設立され、半世紀に渡って存続した東亜同文書院のモデルになったともいえ、その原点として位置づけることも出来る（図2）。その点ではその性格を検討するこ

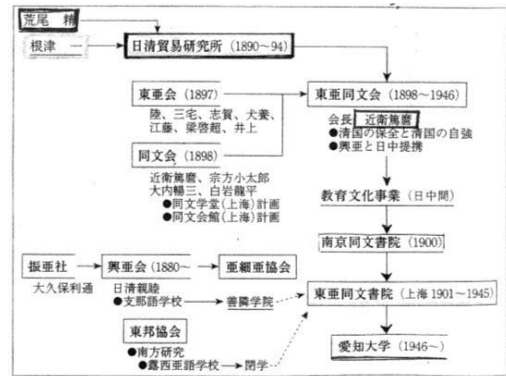


図2 荒尾精とサポートした根津一から始まる日清貿易研究所、さらに近衛篤磨の東亜同文会、そして東亜同文書院から愛知大学へ続く系譜図

とは、この東亜同文書院の検討をするうえでも十分に価値がある。

この東亜同文書院については、戦後、東西冷戦が際立つ中、政治的観念論の流布による大陸侵略のためのスパイ学校だとする政治イデオロギー的な研究が先行し<sup>1</sup>、書院卒業生たちはその風評に抵抗し、一斉に書院について口を閉ざした時期があった。しかし、戦後に日本経済の高度成長を多くの書院卒業生が第一線で支えたので、書院がクローズアップされたものの、書院情報がなく、「幻」の名門校東亜同文書院」と称されたりした<sup>2</sup>。その流れに直接的な変化をもたらしたのは、1989年（昭和64年、平成元年）に生じたベルリンの壁の崩壊であり、それに伴う観念的イデオロギーの呪縛からの解放によるものであった。当時書院の大旅

行から研究を進めていた筆者にとって、この変化を強烈に当時実感したのを思い出す<sup>3</sup>。すでにその時期に実現していた日本の高度経済成長は、その実態がわからないままに前述したように「幻」の名門校東亜同文書院」と称された書院卒業生の活躍が注目されるなど、東亜同文書院（以下書院）をイデオロギーからではなく、また「幻」ではないその実体解明への多面的なアプローチへの関心がもたれはじめるような機運も生じていた。半世紀に及ぶ書院の存在は、各時代の変動への対応もあり、もちろん一言では表現出来ないものの、その研究への自由なアプローチが可能になった点は大きかった<sup>4</sup>。あわせてまた海外の研究者による世界的なパースペクティブな視点から研究を目指すアプローチが見られるようになった点も、新しい動きであった<sup>5</sup>。

このような状況は、書院に先行したそのモデル的存在であった日清貿易研究所に関する研究についてもほぼ同様に注目されたと言ってよい。但し、日清貿易研究所は小規模でわずか3年間の存在であり、残された史資料も限られるが、「日清貿易研究所」が学校であることを知った研究者が学校経営的な教育史の観点から<sup>6</sup>、また貿易と付せられた名称に注目した経済史の観点から<sup>7</sup>、当時が日清関係や日朝関係の開幕期であったことから政治史の観点から<sup>8</sup>、また日清貿易研究所をささえた出身者の特性の観点から<sup>9</sup>など多分野からの個別的なアプローチがなされてきた。それは、日清貿易研究所という独自の名称への関心とともに、近代日本の初のグローバル的教育機関としての存在への注目からの研究であったように思われる。そのような中、貿易を中心に多面的な視

点を入れて分析のアプローチをはかったのが村上克彦の力作であった<sup>10</sup>。また近年、野口武は時代別の研究の流れを精緻に追い、多面的環境の変化に対応したアプローチが課題だとした<sup>11</sup>。

以上の研究は、それぞれの解明が進められ、成果をあげてきたように思われる。但し、研究分野が個別的であるために、日清貿易研究所を全体としてどのように性格づけるかについては、まだ十分には検討されていないように見える。そこで筆者は前述したようにその点についてのアプローチを試みたい。

すでに筆者は東亜同文書院を単なる商業学校ではなく、ビジネススクールとして性格づけた<sup>12</sup>。清国との貿易実務を進める上での清国の商業慣習・システムの修得、度量衡の修得、経営用簿記会計の習得、事業展開および起業方法の習得、それを理解するための清国の歴史文化的基礎教育の修得、貿易実務のための買弁を通さない徹底した清語、英語の実践的語学の習得、事業活動に対する倫理教育、長期フィールドワークによる貿易品の調査と現地風土や人情の理解等が、ビジネススクールの基礎的要件を満たし、貿易実務者養成をめざす目標としていたからである。フィールドワークである「大旅行」調査の成果は堂々と公表公刊され、その中から兵要地理的教育の成果を見出すことは難しい。それにも係わらず、これまで書院をイデオロギー的存在として主張してきた研究は、そのイデオロギーに好都合と思われる特殊な側面としての文言や行動、事象をピックアップした上での一般化、さらには裏付けのない事象へのイデオロギー的な思い入れがその世界では受け入れやすい環

境があったためである。それだけに、実際の教育によりそこで学んだ書院生全体の受け止め方や特性およびその価値を見抜き、それを評価する事が重要であろう。

とするとその原型だと思われる日清貿易研究所の場合はそれがどうであったのか、という点の解明を以下その設立経緯から検討してみたい。

## 2. 荒尾精を追う

### (1) 商業、商人への慣れ

井上雅二の『巨人荒尾精』<sup>13</sup>によれば、荒尾精の祖父は尾張枇杷島の青物市場問屋善九郎の娘と結婚し、その家系の中で、1858年(安政5年)、荒尾精はその祖母と同じ枇杷島の生まれだとする。枇杷島の人たちもそれを信じている。一方、現在の名古屋市西区に当たる地の生まれだとする説もある。いずれにしてもその両者の地理的距離はきわめて近い。のちには現在の名古屋市東区の地、今の愛知大学車道校舎の東側あたりで育ったとされる<sup>14</sup>。

ところで、出生地とされる枇杷島は、江戸時代に尾張平野の開拓開発が進む中で、城下町名古屋に外接する好条件の位置にあり(図3)、市場も立つほどの農産物の活発な集散地であり、地域の中心地として最も発

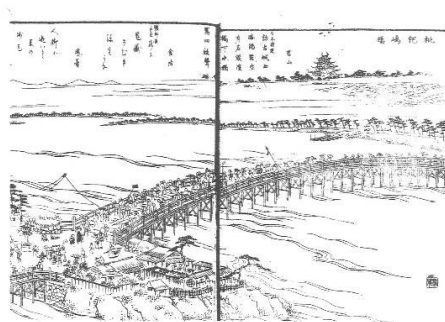


図3 名古屋城下と枇杷島(手前)をつなぐ橋の賑わい

展したところであった。明治以降、戦前までその雰囲気は続いていた。少年時代の荒尾は名古屋に移ってから枇杷島の祖母の家によく遊びに出かけたとされ、農産物などの問屋や店が並ぶ町の中で売り手や買い手の駆け引きも知り、そこに溶け込んでいたと思われる(図4)。明治維新となり、下級

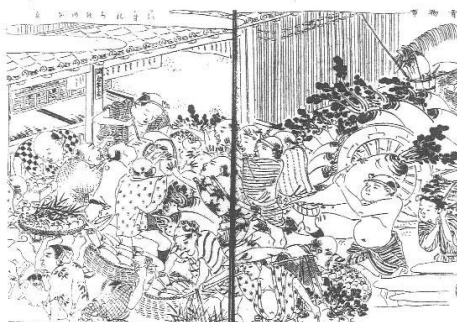


図4 枇杷島の市場町の賑わい

武士の荒尾家は失業し、新たに都となった東京へ一家で出て荒物屋を営んだ。10代の少年荒尾精もそれを手伝ったはずである。しかし、いわゆる武士の商法で店はうまくいかず困窮し、失敗閉店している。そんな中、荒尾精は近くの麹町警察署長菅井誠美に認められ、15歳の書生として引き取られている。店での振る舞いや所長宅のほかの書生とのつきあいでの機敏な立ち振る舞いが菅井に評価されたのであろう。

この一連の荒尾精の一件は、少年期の彼が田舎町ではあれ、活気あふれる当時の農村市場町の枇杷島で、そしてそのあと都会である東京で、商売や商人に身近に慣れ親しみ、実体験していたことを物語る。それはのちにつきあうことになる士族出のほぼ同年配の若者たちとはひと味もふた味も違う巾の広い性格を身に付けることになったものと思われる。士官学校を卒業したあと赴任した熊本鎮台時代に「今西郷」と市民から

人気を得たことはその片鱗であろう。

そしてこのことは、多少先走るが、荒尾精がこのあと軍人教育を受けて軍人への道を進むが、本稿のテーマである日清貿易研究所、またそれより前の段階の、後述する漢口楽善堂での商店経営と商人をつとめ、そのための商業情報の収集も担当することになったとき、その任務と役割への抵抗感はなかったものと思われる。彼の指南役となる国際商人になっていた岸田吟香に最終的に気に入られたのも、そのような体験と気性が備わっていたからであろう

## (2) 清国への関心の芽生え

荒尾精が書生として菅井家に入ったあと、すぐ両親は他界し、菅井誠美が将に親代わりとなった。菅井は他の二人の書生と共に荒尾精に漢英数学を教える私立学校へ通わせ、欧米学では外国語学校で当時主流であったフランス語やフランスの学問を学ばせ、あわせて漢籍と撃剣も学ばせた。荒尾精は菅井の期待にこたえるべく懸命に学んだ。当時、朝鮮問題が浮上する中、清国がその背後にあることが書生や所長宅への来訪者の間でさかんに議論され、荒尾精の関心も次第に清国へ向かった。そして西南の役が起こったことで、荒尾精の関心はさらに高まり、署長の菅井誠美に、外国語学校をやめ、清国事情を研究すべく軍人になりたいと請い、菅井の了承のもと 1878 年(明治 11 年)に教導団へ入団した<sup>15</sup>。そしてこの教導団での砲兵科の 2 年間、徹夜や厳寒も厭わず猛烈に学び、武術も訓練し、体力を養った。一途に清国行きへの努力であったように思われる。

その努力が実り、翌 1879 年(明治 12 年)

には教導団を卒業し、陸軍軍曹として大阪鎮台の半小隊長に就任している。荒尾精にとって初の軍人職であった。ここでも士気を上げる工夫をするなど、指導者としての力量を身につけている。

それらが評価され、翌 1880 年、陸軍士官学校の歩兵科へ選抜された。そこでは荒尾精の志と気風に畏敬の念を持つ 20 余名の靖献派といわれた校友グループが誕生し、荒尾精がそのリーダーとなっている。のちの漢口楽善堂における彼のリーダーシップ力の芽生えがうかがわれる。また、ここでは、1 年先輩に当たる根津一が、彼を中心にした勉強会の「谷中会」を結成しており、それに加わった荒尾精と巡り会っている。そこで根津一は荒尾精の「支那の保全と改良」という壮大な構想に強い刺激を受けて共感し、そのような発想を持った荒尾に敬服し、その後の二人は強い絆で結ばれた盟友となり、後述する日清貿易研究所、さらに東亜同文書院を背負う契機となった。この時期に荒尾精は清国との関わり方にすでに強い信念を持ち始めていたことがうかがわれる。

こうして荒尾精は 1882 年(明治 15 年)にそこを終え、24 歳、陸軍歩兵中尉となり、日本や東アジアの大局を理解するために関係書を読み、先人の意見も聴集し、東アジアのあり方まで検討、構想するようになった。その中で欧米列強の東アジアへの侵入のますますの激しさを知り、その実態を把握するために軍籍を辞し、このさい清国へ渡る決意をしている。少尉になれば、自分の希望する進路を申し出ることが出来るという背景があったためである。

しかし、真っ先に相談した菅井誠美は反対し、ほかの相談相手も皆反対した。それら



の反対理由は、荒尾精の習得したこれまでの訓練では小技術の訓練にとどまっており、師団を単位とした連隊以上を動かす大技術を習得できていないし、実地の訓練も不十分だという点の指摘で、共通していた<sup>16</sup>。盛り上がった清国行きへの志とその熱意が折られた格好になった荒尾精は、そのエネルギーをこのあと雪の木曾山脈へ薄着で入山してぶつけるが、猟師に野獣と間違われて発砲され、危うく命拾いをしている<sup>17</sup>。

### (3) 清国を知る

ところが、この清国行きの挫折が思わぬ道を荒尾精に開くという幸運があった。

それは翌 1883 年（明治 16 年）、熊本鎮台の歩兵大 13 連隊付けに赴任したことから始まった。ここでも荒尾精は青年士官として励み、模範となり、隊内のみならず隊外にも広く知られた。とくに西郷ファンの多かった熊本の人びとからは、荒尾精の体軀の大きさまでもが西郷似であったため、「今西郷」と称され愛された。そして荒尾精にとっては折しも清国からこの熊本鎮台へ帰国してきた御幡（おばた）雅文との出会いが最高の舞台となった。

御幡雅文（1859-1912）は肥前（長崎県）の生まれ。清国への派遣留学生であったが、留学を終えて折良くこの熊本鎮台へ帰国してきた。この御幡雅文は、のちに荒尾が開設する日清貿易研究所で上海語も含め清国語の教師になっているし、のちに三井物産が上海で本格的な活動をするようになると、そこに勤務しながら、東亜同文書院でも清国語の授業を担当している。御幡雅文による『華語跬歩』<sup>18</sup>は日本人用の初の本格的な清国語教科書であった。この御幡雅文に出

会うと荒尾精は同じ宿舎に陣取り、御幡雅文が清国で体験した清国事情を詳細に教えてもらう一方、お互いの仕事外の時間を使って清国語を教授してもらった。荒尾精の熱心な勉強ぶりに御幡雅文は感嘆したという<sup>19</sup>。こうして荒尾精にとっては初めての本格的で生きた清国語と生の清国情報に熊本にしながら触れることが出来た。それはさらなる清国行への自信の高まりと期待につながった。

しかし、荒尾精の度重なる清国行きはすぐには認めてもらえなかった。それどころか 1885 年（明治 18 年）には東京の参謀本部支那部へ配属された。しかし、これも荒尾精にとっては幸運であったといえる。この人事には参謀本部の意向もうかがえそうである。この支那部では、東アジアの典籍や地図類を自由に見ることが出来、荒尾精自らが東アジアの構想を検討出来、専門家的経験者たちとの情報交換なども出来たからである。

こうして 1886 年（明治 19 年）、ついに思いを強め憧れにもなっていた清国行きが実現することになった。28 歳の時であった。少年時に書生として引き取られた所長宅で清国の話を聞き、関心を持って以来、13 年ほどの時が流れていた。

### (4) 清国—岸田吟香との出会い—

しかし、情報を得、あこがれにもなっていた清国には頼れる知り合いはいなかった。そんな中で目指したのは上海であった。上海は日本に最も近く、日本人も住むようになっていたからである。そこで訪ねたのが上海の岸田吟香で、彼はかつて横浜で宣教師へボンから目の治療を受けたとき

作り方を覚えた目薬「精綺水」や清国人に必要な実用書籍を「上海楽善堂」で販売し、財をなしていた。美作生まれの岸田吟香は少年期以来、漢学に秀で、江戸昌平黉でも学び、水戸藩の教師にもなったほどで、挙母藩（三河）詰めのもと、武士や軍人が嫌いになり、武士から足を洗った。そして民間人としてあらゆる仕事をし、目を悪くしてヘボンのところへ治療に駆け込むという経歴があった<sup>20</sup>。そして折からヘボンが進めていた日英辞書の作成をサポートし、この辞書の印刷のために上海まで同行してそれに協力し、その傍らその社交性を発揮し、上海人たちとの間に岸田吟香コミュニティを形成するほどであった<sup>21</sup>。

荒尾が会ったときには、岸田吟香は、東京銀座に楽善堂を開店したほか、新聞社、汽船会社、石油採掘会社、福祉事業など次々事業を展開していく途中にあり、日本人初の国際商人となっていた（図5）。



図5 上海から帰った当時の岸田吟香と晩年の岸田吟香（いずれも『岸田吟香伝』旭町教育委員会刊、1990年より）

類書では、荒尾精が岸田吟香に会って、その目的を告げ協力を請うと岸田吟香はすぐ受け入れてくれたとある。しかし、軍人嫌いで、折からの自由民権運動にも共感し、1880年（明治13年）には後述する「興亜会」のメ

ンバーにもなっている岸田吟香は、50歳あまり。荒尾精はまだ28歳で両者には親子ほどの差があり、荒尾精をそんなに簡単受け入れることはなかったと思われる。フィクションとはいえ戦前、人気があつて、時々上演された荒尾精を主人公にした演劇の脚本では、何日も繰り返し荒尾精が岸田吟香の所へ懇願しに訪れたある日、荒尾精がこれだけの決意がありますと、ついに手元のピストルで部屋の花瓶を打ち抜いたとき、やっと岸田吟香は荒尾精を信用し、受け入れてくれたなど、他の場面も含め、ドラマチックに盛り上げている<sup>22</sup>。

その結果、岸田吟香は地元上海については欧米の租界が中心であり、清国を本当に知りたいなら、長江（揚子江）中流の漢口の町が適地だとすすめた。折しも漢口には日本の領事館が新設され、吟香もなんらかの支援をし始めていたのであろう。動きはスムーズであった。そして漢口へ楽善堂の漢口支店を設け、目薬と書籍、雑貨等の商品を上海楽善堂から入荷することでスタートした。確かに漢口は華中の東西南北方向をつなぐ中心的な町であり、長江で上海ともつながる絶好の立地点であった。店の場所も運搬に好都合な長江沿いが選ばれた。しかし、この漢口については、好条件の地にありながら、この時期、まだ日本人がほとんどおらず、荒尾精が足を踏み入れる1年前の1885年（明治18年）、ようやく前述の日本の領事館が置かれ<sup>23</sup>、数人の日本人関係者がいるに過ぎなかった。上海の領事館（1870）設置より、15年後のことであった。1870年代には日本の領事館がヨーロッパに9館（名誉館長も含む）が設置されるが、清国では上海のほか香港（1872）、厦門と福州（い

ずれも 1874 年)、天津 (1875)、芝罘と牛莊 (いずれも 1876) など 7 領事館であった。1880 年代になってこの漢口 (1885) と広東 (1888) の 2 領事館が設けられた。この漢口の日本の領事館は清国内での先発組の末期に設置されたが、清国内陸部へは初の立地であった。

したがって、荒尾精は漢口における日本人としてほぼ最初のパイオニアとして赴任したといえる。最初の領事が帰国したあと、町田実一が赴任し、少人数の日本人同士で相互に情報交換し、町田領事により日本からの物産を漢口楽善堂で取り扱う提案がなされている。

最初のこの漢口への領事館設置には岸田吟香も協力し、日本との経済的つながりを考えたであろう事は十分考えられる。それゆえに岸田吟香がその筋の上で荒尾精を漢口へ送り込んだという見方も出来る。前述した岸田吟香の荒尾に対するチェックの厳しさとその受容は、荒尾精が単なる軍人ではなく、日清間の貿易取引に関心を持っていることを見極めたということであり、岸田吟香は荒尾精が自分の路線と重なることで信用したのであろう。

こうして荒尾精は、岸田吟香の思いも重なる経済をベースにした清国事情調査と、あわせて軍人としての清国の軍事戦略上の調査を併行ないしは重ねながら進めることになった。

##### (5) 私塾としての漢口楽善堂

こうして店を開きながらの荒尾精の奮闘が始まった。書籍の販売も行ったため、清国の古典籍も含め、多くのいわば参考資料も集められた。しかし、荒尾精ひとりでは対

処出来るものではなかった。今日言うところのフィールドワークによる現地調査はかなり容易ではなかったからである。

そんな折、日本から同年代に近い若者たちが清国へ渡ってきていることを知った。彼らは西南戦争で政府軍に破れた南九州、幕末に官軍に敗れた会津など東北地方の出身者が多く、明治政府のもとでは前途を失ったその先を清国に求めようとしていた。そんな彼らに荒尾精は着目して、彼らを集め、大きくは外事 (フィールドワークによる調査研究) 班と内事 (資料整理) 班に分けて分担させ、内規を作成して組織化し、集団全体を動かそうとする構想を持った<sup>24</sup>。かつて荒尾精が軍事教練で得た指導方法だったといえる。

すでに関心を持った肥後 (熊本) 出身の宗像小太郎が最初からアプローチしてきた。彼の呼びかけなどにより 2 年目になるとそれに応じて、上海や天津などから肥後出身者を始め、東北出身者なども漢口楽善堂に集まってきた (図 6)。その数は 20 人あまりとなった。石川伍一 (秋田) のように必ずしも定着しないメンバーもいた<sup>25</sup>が、皆修羅場



図6 漢口楽善堂における荒尾精と同志たち、及び堂員の出身地分布



図7 漢口丸善堂の本部と3支部の分布及びそれぞれのリーダー名

をくぐってきた若者が多く、自己の目的を持ち、個性的で年齢も幅があり（図7）、荒尾精は彼らを軍隊のようにまとめることはできなかった。

それでも外事班を希望するメンバーが多く、詳細は省くが、漢口を本部（荒尾精）とし、湖南支部（高橋謙支部長）、四川支部（山内巖支部長）、北京（宗方小太郎支部長）と、各地に支部が設けられ、それぞれに3~4名が配置された（図8）。彼らは非公式な外国



図8 主な動員によるフィールドコース（×は行方不明を示す）

人だとわかると当時の清国内では危険であるため、清国人の商人の格好をして、販売と情報を集めた。それでも清国語と方言には不慣れであり、浦敬一（伊犁を目指した）、広岡安太（四川）は行方不明になり、藤島武彦、松田満雄、山崎羔三郎、石川伍一らのように危機一髪の経験者も出た。情報収集のための旅の資金は乏しく、その上に病気にかかり、不慣れな土地での命がけの苦労が多かった（図9）。行程は大変であったが、それでも各地からの情報が集められた。



図9 上海における日清貿易研究所の位置

一方、内事班にかかわる活動として、日本からの商品の輸入と販売という貿易商業活動も行われ、熊本出身者が多かったことから、熊本産の商品が持ち込まれたりして、その販売活動も行われた。

のちに、これらで収集された成果は荒尾によって集約され、編集・執筆は盟友の根津一に託された。根津一は夜にはネズミと友達になるほど根を詰めて半年あまり毎日作業を進め、1892年（明治25年）、後述する日清貿易研究所の時代、『清国通商綜覧』全3巻として丸善から出版し、世に問うた。総ページは2000ページに達した<sup>26</sup>。この本によって初めて清国の実情を知ることになり、日本人の間でベストセラーとなり、あわせて日清貿易研究所の名を広く知らしめた。



この活動も3年あまり、荒尾精が任務を終え帰国すると、メンバーは求心力を失い、ばらばらになってやがて活動は停止した。

### 3. 「日清貿易商会」構想の模索

#### (1) 荒尾精の『復命書』

3年あまりの任期を終えた荒尾精は、1889年（明治22年）帰国し、『復命書』を参謀本部に提出した<sup>27</sup>。そこでは漢口楽善堂での活動の成果が述べられ、華中から清国全体の動きの情報について見聞をふまえた説得力のある形で多面的にとらえ、まとめられている。

復命書の性格上、当然清国の情勢とその分析が主に述べられている。詳細は省くが、まず清国、清朝の歴代の歴史をレビューし、かつての繁栄は今日弊害が積み重なり、外面的には海軍や兵器工場、資源開発などの近代化が進みつつあるように見られるが、内面的には腐敗が極みにまで達しており、今日ではまだ少し保持できるが、このままでは清国自身の長い持続は困難だと述べている。そしてその背景を歴代の王朝史の興亡から論じ、この清朝では満人が多数の漢人を支配する構造の特殊性の中で、長年の矛盾が弊害を増幅し、民心はすでに離れ、統治機構の隅々まで腐敗が浸透している現状を提示している。そんな中で、それを改革しようとする組織は個別的で、全体を指導する人物が出てきていないとする。李鴻章は優れた人材だが、高齢化し、ほかの布政使も同じであり、今後10年間は人材の輩出は期待できないとする。このような乱れは軍においても同様で、著しい軍紀の乱れの事例を多く挙げて示している。したがって、日本が清国と対峙するには、このような清国

の外面と内面のギャップを理解して置くべきだとする。

ところで、以上のような清国の国情を踏まえ、日本が清国と相互の貿易を活発化することについては、東アジアに迫っている欧米勢力の具体的な浸透状況を軍事のみならず、貿易経済活動についても示しつつ、それらへの対抗上、それが必要だとし、あわせて「商権」を確保する必要があるとしている。そのため新たに「日清貿易商会」を設立し、人材を養成することを提案している。そこでは荒尾精がまさに漢口楽善堂で実践してきたシステムをモデルとした内容であったことがわかる。

このように、荒尾精の「復命書」は軍人としての使命を果たしつつ、日清間の貿易開発まで力説し提案するという点でオリジナルな内容であった。そこに荒尾精の本音への転換が読み取れる。そしてこのあと、自ら提案した「日清貿易商会」設立のために動き出すことになる。

#### (2) 「日清貿易商会」への模索

帰国し、「復命書」も提案した荒尾精は、「復命書」の中で提案した「日清貿易商会」の設立を上海で目指すために、まずは時の内閣の担当者をめぐり説得工作を開始した。対象は軍事ではなく、貿易経済の分野であり、関係する省庁は広がった。清国へ行く前、若いながらも知名度は高く、清国の現地で優れて実践的観察の上に具体的な提案を込めた「復命書」を作成した高い評価が、内閣のトップにも会えた理由だったのであろう。

具体的には内閣総理大臣の黒田清隆、大蔵大臣の松方正義、農商務大臣の岩村通俊、

農商務次官の前田正明らであり、いずれも荒尾精の日清貿易人材養成構想に賛成し、それに協力しようとする上々の反応であった。資金は北海道の官林伐採により 10 万円捻出しようという具体的な話まで進んだ。

その確約により、荒尾精は大臣たちからの紹介状ももらい、早速生徒募集のための各地への行脚を行い、講演をして呼びかけた。各地の講演会は盛況で、欧米一辺倒であった世の中に、清国への興味ももたらしたとされるほどであった。それらの講演会のうち、金沢や博多での講演会の記録が残されている。そのうち、1889 年（明治 22 年）12 月、清国に近い博多で行った講演会は多くの若者を含む聴衆が集まっていたので、荒尾も熱が入っていたように思われる。そして当初の荒尾精の構想が語られているので、それをまとめる形で以下に示してみよう<sup>28</sup>。

すなわち、当時の欧米の東アジアへの進出状況が著しいこと、今後の日本は欧米に対抗するには、軍勢力では到底およばないことから 清国との貿易による商業力を発展させることが重要であること、自分は清国で 3 年あまり、そのために清国の商取引や商業商人の状況を観察し、それまでの軍籍、軍人社会を捨てて商工業者となり、商工業の周旋役となって日本の商工業の発展を目指すことにしたこと、しかし、清国との貿易は清国をよく知った上で行わなくてはならないこと、実際、日本の商人が清国との貿易をし始めているが、ほとんど失敗していること、その理由は 3 つあり、一つは清国では共通貨幣がなく金銀の量で行われている。よって金銀銅の鑑識眼や度量衡の実践的知識が必要なこと、清国人の番頭を雇用

しても言葉の壁があり、だまされやすいこと、2 つには清国人の商慣習は多様かつ異様でさえあり、仕入れ時期も慣習的に守られている。それを知らぬ日本商人は失敗することになる。日本商人は商品の価格も私欲に走り、安売りをするなどして損失する。3 つには、これらへの対策は商業といえども、学校も必要だが、それ以上に実地を踏まえた実習訓練がいること。そこで自分としては上海に日清貿易商会を設け、そこに日本の商品を陳列し、販路を開拓する。そのさいその傍らに日清貿易研究所を付設し、日本青年 300 人を入所させ、取引上の清語、英語を磨き、金銀銅の鑑定や度量衡への対応、販売の駆け引きなどを訓練して貿易商人を育てることを目指したい。これらを 3 年間でを行い、うまくいけばもう 1 年間、清国内を実地に巡り、港湾や日本品の取引状況などの観察もさせたい。そしてさらに亜細亜貿易協会を設立して、それに亜細亜貿易研究所を付設して、各地に商会の支店を設け、アジア各地の研究生を貿易人として育成し、アジア全体にそのネットワークを広げたい、という構想を開陳した。

この中でもっとも重要な主目的は、貿易取引実践の場として、そしていわば貿易会社としての日清貿易商会の設立であり、付設の日清貿易研究所はそのための手段としての語学研修や通貨、度量衡などの基本的な学事実習の場であった。とてもビジネススクールとはいえない内容であった。つまり日清貿易研究所の設置が主目的ではなかった事である。

こうして、各地での勧誘的講演・演説はそれなりに功を奏し、全国から 300 人の志願者が集まり、学科や身体検査により、150 人

の青年が入学することになった。

### (3) 混乱の中から浮上した「日清貿易研究所」

こうして計画を進める段階になったとき、岩村農商務大臣が病気で倒れ、陸奥宗光に交代したため、前田正名農商務次官も辞任、山林局長の官林伐採反対、さらに自由党と改進黨による政府への予算削減要求などもあって、資金源とした山林売却案の見通しが立たなくなっていった。

そんな中、荒尾精は予想外の事態の進行に途方に暮れて、自殺まで考えたほどであった。しかし、自殺決行の直前、階下の釜の湯のはじける音に覚醒したという<sup>29</sup>。荒尾は気を取り直し、大義を信じて<sup>30</sup>、最後に長崎から乗船した60人も含め150人の青年や職員も含めた200人と上海に向かった。上海上陸後一同揃って日本領事館に挨拶に出かけている。そして1890年(明治23年)9月23日、当初計画された黄浦江東の浦東地区ではなく、高橋謙などによって用意されていたイギリス租界大馬路の一角である労合路の3棟からなる仮校舎を確保して開校式を行った。各県知事からの祝詞もあり、飾り付けや酒の饗応も在り、盛大であったという<sup>31</sup>。荒尾精はここでも改めて貿易の重要性を挨拶として述べ、その趣旨で日清貿易研究所の精神と初の国外での学校であることから、生徒となった青年たちに厳格な規律を守ることなど訓示している。しかし、財政のめどの立たない中での苦しさを胸に抱えたスタートであった。

そのことが上海での生活が始まるや、たちまち困難に直面する事になった。上海特有の気候や湿地からもたらされるマラリア

などの風土病でほとんどの学生がダウンした。そのため少ない予算はその治療費で消費され、荒尾精は根津一に代理を頼み、すぐ金策のため東京へ向かった。初の正月を迎えるに当たり金庫は空で、留守役の根津一は、三井洋行や岸田吟香などからの援助で、生徒たちに正月らしい祝いを演出したが、商業実習や授業も進まず、生徒たちの間には不安と教育環境への不満が高まり、代理の根津一でもそれを抑えきれない状況となった。

翌年2月、ようやく帰ってきた荒尾精は懸案の財政問題がうまくいかなかったこと、そしてそのために当初目指した日清貿易商会の設立を断念したことなどを生徒の前で告げた。その結果、生徒の中に動揺が高まり、不満グループが上海の日本新聞社に批判記事を書かせたりして、生徒の中が割れた<sup>32</sup>。結局、荒尾精は不満の溶けない30人を退学させざるを得なくなった。退学者には、荒尾精を信じられなくなった九州以外の出身の生徒の多くが含まれていた。

そして当初目的の商社の機能の日清貿易商會を廃止して、ここにその付設としていた日清貿易研究所部門を中心に据えた学校への転換を図った。そして教頭には猪飼麻二郎長崎商業学校の校長を招き、教学部門の再編成を行い、あらたな出発を目指した。そして校舎も競馬場近くの洋館へ移した(図10)。こうして2年目の10月3日、創

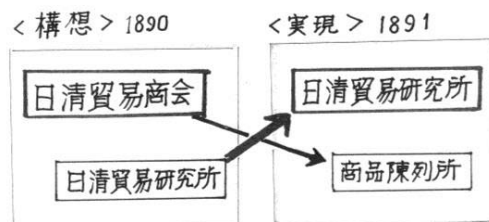


図10 当初案「日清貿易商會」から「日清貿易研究所」への浮上

立 1 周年記念式を多くの来賓を招いて催している。

このような波乱と再編の中で、当初付設扱いであった日清貿易研究所が表面に浮上し、図 10 に示すように、その中心になることになった。このことが、以下のように実質的に日本初のビジネススクールを誕生させる結果となったのである。

### 3. 誕生した「日清貿易研究所」

#### (1) 出来上がったカリキュラム

日清貿易研究所の性格を知るポイントは、そのカリキュラムにある。現在わかっているのは、表 1 に示す 1 年分のみである。当

表 1 日清貿易研究所第 1 学年履修学  
科目予定表 (『沿革史』より)

合計	柔道	臨時講義	商務実習	習字	法律学	経済学	商業算	作文	和漢文学	簿記学	支那商業史	商業地理	英語学	清語学	科目	期
40	6	1						3	2	1	2	3	3	6	12	時間
	兵古式	心得						和算	信文	簿記	支那	支那	英語	清語	前半	前期
43	6	1	3	1				同	同	同	同	同	同	同	12	時間
	同上	同上	同上	同上				同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	後半	後期
44	6	1	6	1				2	1	1	2	3	3	6	12	時間
	同上	同上	同上	同上				洋算	契約	同	同	支那	支那	英語	後半	前期
48	6	1	8	1	1	1	2	1	1	2	3	3	6	12	12	時間
	同上	同上	同上	同上	行法	貿易	同	同	同	同	同	同	同	同	後半	後期

初の日清貿易商会を中心とした構想では、日清貿易研究所はあくまで付設であり、語学と商品取り扱い上の処理技術程度の習得の場であり、きちんとしたカリキュラムはなかったと思われる。1 年目に在学した鳥居素川の日記にも上海各地を出歩いた記録はあるが、授業を受けた記録は見られない<sup>33</sup>。前述したように 1 年目の研究所内が混乱していた状況下では、日清貿易協会もその体をなさず、また日清貿易研究所の方も授業

や実習が正常にはなされなかったと思われる。

前掲表 1 はそのような新たな出直しの中で、第 1 年生用とされるカリキュラムである。退学せず残留した生徒用の日清貿易研究所独自の新たなカリキュラムとして急遽作成したものともみて良いだろう。

それによれば、全体は「前半季」と「後半季」に分けられ、それぞれの季がさらに 2 期に分けられている。そして語学の中心は清語と英語で、年間を通じて「清語」は週 12 時間、「英語」も 6 時間課せられている。この課業体制はのちの東亜同文書院のそれとほぼ同じであり、書院へ継承されたことがうかがわれる。次いで簡単に各科目の趣旨を見ると、アジアさらに清国を多面的に知る「商業地理」、数千年来の盛衰と今日の状況を知る「支那商業史」、後述する「簿記学」、古代以来の由来を知る「和漢文学」、清語、英語への「作文」、商業必須の算用を学ぶ「商業算」、「習字」、「臨時講義」、「柔道、体操」などで、時間数は科目によって異なるが年間を通じて課せられている。それに対してその原理を知りつつ、需給や生産分配の仕組みを知る「経済学」、および立法とその思想を学ぶ「法律学」は最終的な理解科目として位置づけられ、後半季の後期に課せられている。また重要な実習科である「商務実習」は基礎が出来てからの前半季の後半から後半季の最後まで続くように配慮されている。また商業の「簿記学」は、記帳の原理を理解した上で、投資から取引処理、そして売買経営まで実務を習得する実践的な科目となっている。ところで清国末期の簿記を研究した田中孝治は、この簿記の学習が清国の商業地理、商業慣習、清国の制度の理



解につながると指摘している<sup>34</sup>。またそれに関連して「商業実習」では前半季の後半で日清両国の度量衡の使用法、日清貿易品の研究を習得する。とくに清国では統一貨幣がなく、度量衡は地域差は大きく、取引上の両替には重要な技量が必要であり、重要視されたことがわかる。さらに後半季では日清両国の商業組織と営業方法を習得し、そのあと研究所での模範実習と小規模になったが商会での実習経験が課せられ、ビジネス実践への橋渡しが準備されていることがわかる。

いずれにせよ、このカリキュラムは商業実務の基礎科目と実践科目の数と時間数が過半を占め、語学を加えると 8 割以上になり、生徒を事業経営の世界へ乗り出すプログラムになっている。その点では、この日清貿易研究所は、2 年目の大改革によって、まさに日本初のビジネススクールへとその姿を変え、飛躍したといえる（表 1 参照）。のちの東亜同文書院は、先走ったことを言えば、その発展形だといえる。その点ではこの改革再編はラッキーであったといえる。

## (2) カリキュラムの背景

では、このようなカリキュラムの内容がなぜこの時点で誕生したのであろうか。ここでは荒尾精構想にも影響したのであろうその前史を人脈とともに検討してみる。

清国への関心、明治初期、琉球や台湾、さらに朝鮮を巡る問題発生の中で、その背後にいる清国の存在を知ったことからであった。そこで初めて両国の親善をはかるため大久保利通が渡清して李鴻章と会談し、初めて道をつけたが、帰国した大久保利通は暗殺され、中断してしまった。それを引

き継ごうとした海軍大尉曾根俊虎は有志で「振亜社」をつくり、1880 年（明治 13 年）「興亜会」を結成、日本では最初といえるこの時期に清語を教える学校を設けている。のちにこの会がいわゆるアジア主義の原点だとする見方を呼んだ<sup>35</sup>。会長はのちに東亜同文会のリーダーにもなる長岡護美であった。この会はこのあと清国会員を考慮して「亜細亜協会」と改名した。この学校では、多種の古典・漢文や西欧の「自由の理論」購読、洋算、などが開講され、別科と夜学も開かれた。明治後半になると、この「亜細亜協会」は、のちに誕生した東亜同文会に併合されている。

また図 6 で示したように幕末の官軍によって敗れ、未来を明治政府下では見いだせないと考えた会津を中心にした東北の若者や、1877 年（明治 10 年）に西南戦争で敗れた西郷軍の南九州の若者たちが、新天地の見も知らぬ清国へ出かけたことは前述した。荒尾精が漢口楽善堂に集めた若者たちはこのタイプであった。

その中で 1877 年（明治 10 年）、西郷軍として戦った肥後の佐々友房は戦後一時収監されるが、解放されたあと、西南戦争の戦場として荒れ果て、疲弊した肥後・熊本の再興を目指すにはまず教育からだと、1879 年（明治 12 年）私学の「同心学校」を熊本に設立した。そしてこの学校では清語と韓語も教えた<sup>36</sup>。佐々友房は早くも清国や朝鮮とのつながりを肥後の復興要素に考えていたのである。前述した「興亜会」とほぼ同じ時期の日本最初の清語教育であった。この学校は 1881 年には「同心学舎」と改名され、翌年にはのちに熊本の私学の源泉となる「済々黌」と改名、ここでも清語教育は御幡雅文に

よって支那学科として特設継続された。明治 17 年 (1884 年) のカリキュラムはそのすべてを示せないが、多種多様の著名な古典漢文の購読、作文、習字、数学、物理、英文購読では、原文での地理書、万国史、米国史、仏国史、英国史、文明史、理学書などの購読、英作文、経済学、法律学、刑法、理財論、そのほか多くの科目が設けられ、清語教育は特設科目として設けられ、高等専門科の一つに支那語学の会話も設けられている<sup>37</sup>。その多様さは後述する東洋学館がより欧米指向的ではあるが、その内容には重なりも見られ、前述したその後の日清貿易研究所のカリキュラムとも重なる部分が見られる。そして同校ではその後カリキュラムは旧制中学並みに整備されていく。

このように熊本は清国の世界に熱い思いを持っており、1881 年には旧士族を中心に紫冥会を結成し、のちにはその一部の組織として熊本国権党という清国や朝鮮もネット化して地域振興をはかる実業集団からなる地方政党を生んだりしたほどであった<sup>38</sup>。国内はもちろん、海外とつなげるために県や国まで働きかけて 1887 年 (明治 20 年) 熊本県西部の有明海と八代海の境に位置する宇土半島の先端に三角港を完成させている<sup>39</sup>。これらのメンバーには宗像小太郎を始め井手三郎、片山敏彦、広岡安太、松田満雄、山田珠一、奥村金太郎、前田彪、川原角次郎、佐野直喜、などの渡清経験者が多く、このあと日清貿易研究所とつながる人物も多かった。

1884 年 (明治 17 年) 6 月、それまでのベトナムへの権益紛争から清仏戦争が起こり、フランスが福建省と台湾を中心に勝利すると、これが日本に危機感をもたらした。早

速、宗像小太郎は佐々友房に同行して情報を収集するために上海へ出かけている。当然清国への関心も高まり、8 月には初めて上海の虹口の乍浦路に「東洋学館」が設立された。自由民権派、九州改進黨などは清国に近く、フランスの進出に危機感を感じた熊本、福岡の九州グループが中心になった<sup>40</sup>。近接している清国を多面的に知り、清国内の革新派との提携し、清国に憲政も実現させたいという構想目的があった。当然、カリキュラムは清語教育を含む「支那学」が中心に置かれ、関連的に政治経済学 (付支那学)、法律学 (同)、商法学 (同)、理学 (当分開講せず)、哲学 (同じ)、の 5 門分野が配置され<sup>41</sup>、未開講も含むと今日の大学の経法文学部並みのスケールで、ギリシャ・ローマ史や西洋語も多く含まれ欧米流の科目が多い (表 2)。これは欧米が租界に進出しており、上海

表 2 上海における開設当初の東洋学館のカリキュラム表 (注 40 の熟論文 (2008) より)

課程	専 門	卒業年限	級	授 業 科 目
予科		2 年	第 2 級	中国語学、英語学、日本史、中国史、万国史、英国史、数学
			第 1 級	中国語学、英語学、仏国史、米国史、経済学初歩、代数学、幾何学
専攻	商法学	3 年	第 1 年級	中国語学、英語学、算術、簿記、洋算、簿記学原論、簿記術実験、日本商業手続、経済原論
			第 2 年級	中国文学、英文学、簿記各体、銀行論、中国商業手続、法律原論、美国商法
			第 3 年級	中国文学、英文学、英国商法、仏国商法、商業史、貿易実践、万国公法私法大略
	政治経済学	4 年	第 1 年級	中国文学、英文学、経済原論、論理学、ローマ史、欧州立憲史、ギリシア史、文明史
			第 2 年級	中国文学、英文学、英国憲法史、国法学、フランス語或いはドイツ語学
			第 3 年級	中国文学、英文学、銀行論、行政学、美国憲法、万国公法、法律原論、フランス語或いはドイツ語学
			第 4 年級	中国文学、英文学、租税論、財政論、貨幣論、万国私法、法論
	法律学	4 年	第 1 年級	中国文学、英文学、法律原論、美国民事法律、仏国民法、日本民法、論理学、フランス語学
			第 2 年級	中国文学、英文学、美国民事法律、仏国民法、日本民法、フランス語学
			第 3 年級	中国文学、英文学、美国民事法律、美国憲法論、仏国民法、ラテン語
			第 4 年級	中国文学、英文学、法論、ローマ法律、仏国商法、英国憲法論

での欧米人との交流も考慮したためであろう。理学と哲学が開講出来ない状況からは、教員がこの時期に揃ったのかどうかも気になるところである。また清国に関する科目はほとんど語学と文学が柱で、多少商取引関係科目もあるが、全体としては教養科目

主体のカリキュラムであり、商業・貿易人材育成を目指そうとした設立目的との間にはギャップが見られる。明らかにビジネススクールのレベルにはなっていない。しかし、学校設立のカリキュラムとしてはかなりバランスをとり、先進的な意気込みがあったように思われる。と同時に、財政力や校舎問題など、後述する経過を見ると大風呂敷を広げたようにも思える。それは荒尾精がまだ清国へ向かう 2 年前のことであった。東洋学館の募集期間が迫る中で志願者が増えたが、進学希望者が訪れた上海でこの学校自体を見つけるのが難しいということが評判になり、学校が有名無実ではないかという評判が立った。またあわせて志願者には徴兵逃れが多いと地元で言われるようになった。加えて、また設立者が政府批判の目立つ自由民権運動家が多く、さらに財政力の課題もあり、結局、文部省は 2 年目になっても設立認可を与えなかった。そのため画期的に構想された日本初の清国での本格的な学校展開は 1 年中途で挫折してしまったのである。しかし、のちに荒尾精のもと「日清貿易研究所」を再編するときに荒尾がこの東洋学館の存在と先進的なカリキュラム内容を知っていたかどうかである。

### (3) 『清国通商綜覧』のまとめと刊行

ところで漢口楽善堂での 3 年あまり、清国の商業経済を中心に情報を集め研究した荒尾精は、その過程で構想を得た日清貿易商会の設立準備と復命書の執筆で帰国後も多忙であり、その情報整理と編集を盟友の根津一に託した。その意向を受けた根津一は半年間、飲酒と喫煙を絶ち、一心不乱に仕事に没頭したことは前述した。それがまと

まり、1892 年（明治 25 年）『清国通商綜覧』として日清貿易研究所（発売は丸善商社書店）から刊行された。全 3 巻の 2000 ページの大著となった<sup>42</sup>。日清貿易研究所が発足して 3 年目のことであった。しかし、その編集は日清貿易研究所が発足する前から進んでいた。本文中に日清貿易である商業学研究所を設けるという構想を実行中であることを述べているからである<sup>43</sup>。この書は日本人にそれまで知らなかった清国の実態を総合的に伝える書として当時ベストセラーになったという。日清貿易研究所もこれによって知名度を挙げた（図 11）。

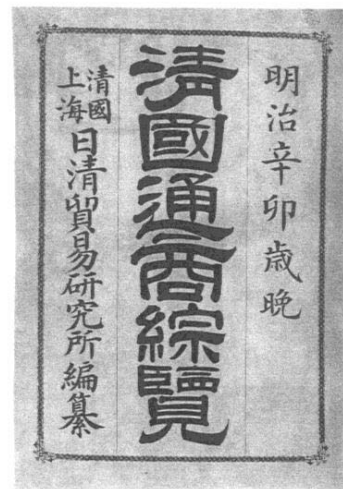


図 11 『清国通商綜覧』の表紙

この書の第 1 編（門）は「天」の巻として「商業地理」から始まり、荒尾精の貿易重視と日清貿易研究所の発足に合わせていることがわかる。最初に清国の位置、人口、人種、地形などが示され、次いで 18 省と北京、南京について気候や交通、物産等も加えた地理概況がまとめられている。続いて開港され、貿易には不可欠な 25 港が、地理的条件や沿革をベースに貿易状況、物産、船舶、居留地等、貿易関係を中心に一部データも

加え丁寧に紹介され、そのあと気候、風俗、教育、宗教などの基礎的状況も紹介している<sup>44</sup>。

第2編は行政組織とその管理に係わる歳出入、塩、茶、農政、鉱山、新旧海関、税、貨幣、度量衡、郵政。第3編は運輸関係で海陸運、交通機関、倉庫、保険。第4編は金融関係。第5編は通信。第6編は生業で、工業、新(近代)工業、農業、養蚕業、漁業、牧畜業、山林業、外国貿易、などに触れ、最後にまとめとして、なぜ日清貿易が不振であるかについて、清国商人の特性も指摘した上で前述した3点を挙げ、その打開策こそがもっとも重要な貿易人材の養成にあり、いま日清貿易研究所という商業学研究所を設け、日清貿易品陳列所も設けて生徒に実習させる計画であり、これは空論空想ではないと述べている<sup>45</sup>。

そして巻末には「雑記」として、同郷の会館、問屋と商店組織、訪問の仕方、事業の起業に關すること、家の借り方、ビザ、清国内の旅行注意ほかの実用記事が付録され、清国との貿易の進め方を紹介している<sup>46</sup>。

この第1編の付録として6付録が編集され、650ページあまりの第2冊目が形の上では第1冊目の続編になっている。その第1付録は農工商史で、支那の歴史の中での人口、国家、社会、風俗、学術、工芸、農業、工業、商業、山林保護、製塩、市、貨幣などが時代別にその特徴項目を挙げながら明代までたどり示し、第2付録では日清貿易史が事例とともに示され、第3付録では上海における英米の居留地規則、第4付録では、日清修好条約やほかの章程が、第5付録では清英間の諸章程や関税が、第6付録では清国の名士が示した意見や用語の解説が収

録されている<sup>47</sup>。編集はすっきりしているわけではないが、歴史を理解しながらの貿易に關した内容が柱となっている。

このように『清国通商綜覧』は、漢口樂善堂時代の荒尾精を中心としたメンバーの収集した膨大な情報がまとめられており、歴史的世界と生の生きた世界を展開している<sup>48</sup>。それらはすでに意識されていた日清貿易研究所の教育に直接的に役立つものであり、「商業史」や「農業史」、さらに「貿易」關連の科目は、再編された日清貿易研究所における清国の歴史的背景世界を理解する新たな授業にもつながり、新たなカリキュラム科目に取り入れられたことは間違いないと思われる。

また第2編は「地」の巻として第3冊目に当たり、清国の各種工芸品の紹介で、優れた生産物については説明のほか多数の絵カタログで図示もされている(図12)。これは

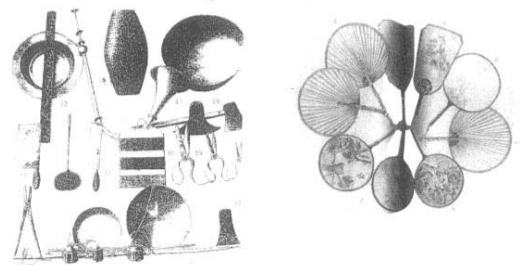


図12 『清国通商綜覧』に紹介された清国商品のカタログのうち2例

1890年(明治23年)に東京で開催された第3回内国博覧会へ出品目録で、清国側の貿易品が600ページにも及んで紹介されており、よくこれだけの工芸品を収集したものと荒尾精をキャップとする漢口樂善堂のスタッフの努力と力量に驚かされる。のちの東亜同文書院の「大旅行」では各地を巡った書院生たちが、各地から工芸品や製品



を収集し、それが10万点に達し、書院構内の商品陳列所に陳列収蔵され展示されたが、それはこのカタログがモデルになったと思われる。しかし、この10万点の商品見本は、第2次上海事変（1937年）による校舎焼失によりそれらがすべて消失したことは残念なことであった。

このように『清国通商綜覧』は、漢口楽善堂時代の荒尾精を中心としたメンバーの収集した膨大な情報がまとめられており、歴史的世界と生の生きた世界を幅広く展開し、清国に関する貿易を意識した百科事典的な側面も持ち合わせていた。それはすでに意識されていた日清貿易研究所の教育のバックグラウンドとして直接役立つものであり、新たなカリキュラム科目の中に取り入れられたことは間違いないと思われる。そして清国との貿易人用の必携書にもなった。

また、この『清国通商綜覧』は根津一が編集したとはいえ、内容は荒尾精の成果である。軍人であり、本来、清国を軍事戦略的にとらえるべき荒尾精の立場からすれば、この書は完全に詳細な清国商業案内的な内容であり、貿易実践用必携タイプの内容になっている。たしかに荒尾精は軍事戦略目的の「復命書」の報告書は提出したが、その内容も日清貿易の重要性について東アジア情勢を踏まえて主張する観点が含まれている。それだけに、この書はこの時期の荒尾精の関心事が完全に日清貿易指向に傾いており、貿易に中心を置くスタンスへと変化したことを明確に示した成果だといえる。したがって、目指すは日清貿易商会であり、それに付設させる日清貿易研究所であった。しかし、荒尾精の当初の思惑はずれた。しかし、代わって柱となった日清貿易研究所の

生徒を苦勞して卒業させると、軍籍を脱ぎ、京都東山へ身を引き、日清戦争による教え子たちの死を悼み、清国への賠償に異を唱えた<sup>49</sup>。そして再登場するときには視点は台湾から始まる東南アジアとの貿易組織の確立へ向けられていた。この書は構想段階から荒尾精の思考を大きく貿易中心へと転換した証と見て良いだろう。貿易、商業への強い指向性への転換は、本稿で最初に述べた少年期の市場や商店体験の記憶への親しみが湧き上がったとしか思えないところがある。

#### (4) カリキュラムと人脈

以上のような状況から、再編されたカリキュラム科目はどのように形づくられたかはおぼろげながら推測できるが、明確な科目ごとの担当者については一部を除いて不明である。

『沿革史』の中に、熊本時代から順に係わってきた宗方小太郎の『懐旧談』が収録され、その中に、当初計画された「日清貿易商会」の担当は遠山景直、中西正樹、高橋道、井深彦三郎、平川恒吉、中島真一らがあたり、「日清貿易研究所」の方は、かつて熊本鎮台で荒尾に清国語を教えた御幡雅文、木下賢良、明治に入ってから最初（1876年、明治9年）に内陸の四川まで旅をした肥後出身の竹添進一郎のほか、奥田、浅野（事務職）らなどと外国人では清国人の沈文藻、英国人のアスターらが担当したとしている。実際、宗方小太郎は自分の日記の中で、地理を教授したこと、作文の添削をしたこと、また、肥後・熊本から簿記の先生を迎えたこと<sup>50</sup>、などを記している。それらを見ると、急遽、日清貿易研究所を中核に据えることになっ

た中で、カリキュラムを作成する際に、宗方らこれまでの関係者がその中心となったこと、その中でも肥後・熊本関係者や福島など東北出身者が中心を担ったように思われる。

この背景には、熊本については、前述したように明治維新後の西南戦争直後にすぐに清国との関係を重視しながら、西南戦争で破潰された郷土を建て直そうとした肥後・熊本の佐々友房の「同心学舎」から「済々黌」に到る学校教育を啓蒙的に広げ、カリキュラムにかかわった、佐々友房、宗方小太郎、御幡雅文などの人材の輩出があったためで、かれらは当然日清貿易研究所にもコミットしている。結果的に失敗したとはいえ、日清貿易研究所よりも早い時期に上海に開設された東洋学館へ入学しながら、その閉鎖による中退者が、そののち店開きをした漢口楽善堂を求めるかのように移動し、6人が入社（山内巖一福島、荒賀直順一山形、中野二郎一福島などの東北出身者も）しており、また済々黌からは5人が入社して荒尾精のもとで活動、運営を行っている<sup>51</sup>。彼らは在学した東洋学館や済々黌で受講した経験があり、そのカリキュラム情報についても荒尾精に伝わっていった筈である。

こうして荒尾精の漢口楽善堂へは、宗方小太郎、井手三郎、片山敏彦、前田彪、松田満雄、奥村金太郎、河原角次郎、広岡安太、佐野直喜、緒方二三ほか10人を超える熊本県出身者が参加していた。他の県の出身者は合わせると熊本県出身者の数を上回るが、1県で10人を上回る熊本県出身者数は突出していた。ほかの県のメンバーでは、荒尾精をはじめ、前述の東洋学館からの6人と、浦敬一、藤島武彦、高橋謙、白井新太郎、中西正樹、石川伍一、井深彦三郎、田鍋安之助、

山崎羔三郎、大屋半一郎、ほかの有力メンバーで、この内の大屋は前述の「興亜会」に付設された最も古い「支那語学校」の出身者でもあり、他にも数名の同じ出身者がいた。

(図13)

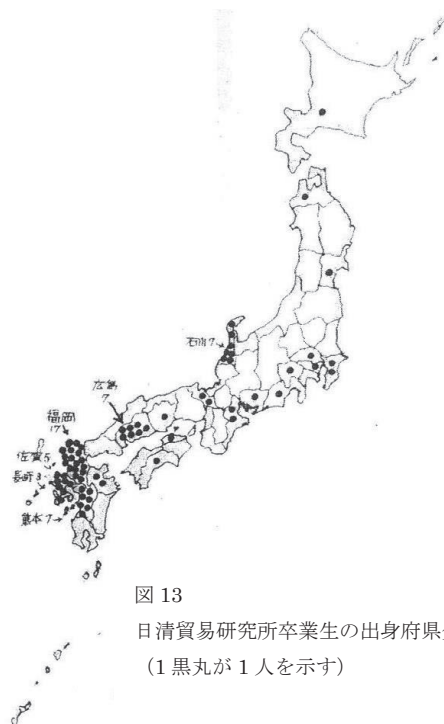


図13  
日清貿易研究所卒業生の出身府県分布  
(1黒丸が1人を示す)

そして以上のような動きの中で、1890年（明治23年）、日清貿易商会と同研究所が誕生したのである。しかし、繰り返すが当初予定していた日清貿易商会は財政上白紙となり、付属的扱いであった日清貿易研究所が教育機関として表舞台に浮上することになった。創設には荒尾精のほか、宗方小太郎、山内巖、高橋謙、中西正樹、田辺安之助ら有力メンバーが協力し、荒尾精が金策で留守をしているときに、上述のような各学校のカリキュラム内容と独自のバックグラウンドをベースにした可能な科目群を、清国貿易を担う担当者養成という目的で、長崎商業学校長から赴任してきた猪飼麻二郎教頭の指導と、1年目の後半に帰国した荒尾

精との指導の下でカリキュラムづくりを行ったということであろう。

ちなみに入学者と指導関係者を見ると、熊本勢はさらに多くなり、指導的立場となった宗方小太郎や片山敏彦を含め、20 人を超えている。中には病気になり 1 年目で退学せざるを得なかった鳥居素川もいた。しかし、彼もこの日清貿易研究所での経験がベースとなり、のちジャーナリズムで活躍した。他の県のメンバーの中では、「興亜会」に敷設されていた支那語学校出身者も「東洋学館」出身者と同数ほど入学するなど、それ以前の清国を対象とした学校教育からのつながりは無視できない。漢口楽善堂の指導メンバーも同様である。清国への関心の高まりをベースに清国との貿易指向がさらに高まっていった時代背景がうかがえる。このように日清貿易研究所はそれ以前の教育試行の歴史と日清間の環境変化に支えられてビジネススクールとして成立したといえる。

#### 4. おわりに

以上、荒尾精を核にして日清貿易研究所との関わりと、日清貿易研究所の性格について、それ以前の清国へアプローチをしようとする試行期ともいえる学校との比較や繋がりに留意して検討した。

荒尾精は短い人生の中で、少年期の農村市場の楽しさや人生を変える商店経営という厳しさを身を以て経験した経歴がある。その厳しさの中で、警察署長にある意味で拾われたことが、荒尾に包容力とまじめさを備えさせたように思われる。あわせて、警察署長下の書生時代、朝鮮と清国という国際関係を知り、以降の軍人養成期にその焦

点清国へむけられ、清国への好奇心と関心が強まっていった

そして参謀本部で清国研究をするチャンスが与えられ、ついに清国へ出かけられる事になった。その入り口で出会ったのが岸田吟香だったのも幸運であった。士族をやめ、民間人として自由に起業する岸田吟香に新鮮さと面白さを感じたと思われるからである。それは岸田吟香から新設されたばかりで、清国のへソに当たる位置にある漢口商店楽善堂を任された時に、かつて父親が失敗した苦い金物屋経営記憶を思い出したに違いない。『清国通商綜覧』の中で、清国での失敗をしないためのノウハウを詳細に調べ挙げ、掲げているのは、なき父親への鎮魂のように思えるからである。それだけでなくあれだけの清国情報を収集したのも、もう失敗はしたくないという強い思いがあったからであろう。そしてそのための訓練や学校を作るという強い発想もそこから来ているように思われる。実際、ほかの軍人でそのような発想と実践をした例はみられず、そこに荒尾精の強烈な個性があふれている。『清国通商綜覧』刊行のための調査は荒尾のそのような魂と心意気の爆発であり、真骨頂であったと思われる。

しかし、さらなる清国貿易のための商会設立は支援してくれる日本政界の混乱の余波を受けて、立ち往生し、父親の金物屋の失敗の記憶に匹敵した。両親はそのあとなくなっている。手立てを失った荒尾精も自殺まで考えた。その思いを断てたのは、釜戸の大きな音だったというが、それによって覚醒した荒尾精は資金の乏しい中、なんとか生徒たちをつれて上海へ渡った。

状況悪化の中、150 人の生徒の内、荒尾精

から離反して去ったのは30人ですんだ。大半は荒尾精を信用してくれ、荒尾流の改革が可能になった。ちょうど金物屋に失敗して途方にくれた時、手をさしのべてくれた警察署長のタイミングとよく似ている。資金不足から日清貿易商会という本命をカットしたのは大きな決断であった。しかし、その代わり付設のつमりの日清貿易研究所を新しい本命に転換出来たのは成果であった。本体は3年間で打ち切りとなったが、それが事業を集約化でき、漢口楽善堂の経験も生かし、思い切り清国貿易可能な人材育成に焦点を合わせることが出来た。しかも、残留した生徒や指導者たちは、他の学校の体験者たちも多く、カリキュラム作成の知恵を出してくれたし、転任してきた前長崎商業学校の校長も大いにサポートしてくれた。

こうして、清国の言葉を主力に使う語学と、貿易、商業実務を実践的にも行い人材養成を目指す日本初のビジネススクールが上海に誕生したのである。その意味では世界初のビジネススクールの誕生であった。ともいえる。そこでは荒尾精の『清国通商綜覧』で見せた真骨頂がより一層生きることになった。そしてこの実績は次の東亜同文書院に継承され、ゆっくりと熟成されることになる。

以上の、荒尾の人生史と漢口楽善堂から日清貿易研究所とを絡ませて、まとめとしたが、荒尾だけの人生史ですべてが決まったわけではない。最後に若干の研究展望を試みて終わりにしたい。

荒尾はたどり着いた日清貿易研究所でも苦勞したが、ほぼ同じ時期、同じような試行が全国で展開していた。たとえば、高木秀和がアプローチをしている同時期の昆布中心

の水産物の清国輸出のさい、清国商人の強力な組織力に日本側商人が圧倒され、山田良政が学んだような水産講習所での対応策を習得する場が設けられるほど、政府の支援も生まれた。しかし、日本側の組織の不統一で、その壁は乗り越えられなかったという。当時、各分野で貿易への同じような初挑戦が行われていたことは間違いない。荒尾はそれを外地、清国において日本人側の人材養成という局面で切り開こうとしたのである。各分野の試みと日清貿易研究所がその時期にどうつながる可能性を持ったのか、また、あわせてその際、清国商人と日本商人との間のもっとも肝心な具体的な交渉のダイナミクスがどうであったかという解明の視点はまだ不十分であり、今後の課せられた研究課題でもある。また、日清貿易研究所を巣立った卒業生は、直後の日清戦争に一部は通訳従軍など思わぬ道を経験するが、その後、同研究所で修得したビジネスへの道をどう展開したかは、同研究所の機能の評価としても重要である(図14)。その点、



図14 日清貿易研究所卒業生(明治26年6月)

野口武が「立身」という視点で詳細なデータを作り、踏み込もうとしているが<sup>52</sup>、その先に何を見ようとするのかにも課題が残る。この分野に踏み込みつつある両氏には今後の研究の発展を大いに期待して、長くなっ



てしまったが、この幕を閉めたい。

# 「付記」

本稿を作成するに当たり、2018 年度および 2019 年度文科省科学研究費の基盤 (C)

「20 世紀前半・民国期における中国の経済的ネットワーク展開と地域統合に関する研究」の一部を利用した。

また、本研究をまとめるに当たり、とくに国会図書館と熊本県立図書館、青森県立図

書館には多大なお世話になった。お礼申しあげる。

<sup>1</sup> たとえば、野間靖 (1964)「日清貿易研究所の性格とその業績—我が国の組織的な中国問題研究の第一歩—」、「歴史評論」、167 号、68-77。大森史子 (1978)「東亜同文会と東亜同文書院—その成立事情、性格及び活動—」、「アジア経済」、6 月号、76-92。

<sup>2</sup> 藤田佳久 (1993)「「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」、愛知大学東亜同文書院大学記念センター編集「東亜同文書院大学と愛知大学」所収、六甲出版刊。

<sup>3</sup> 藤田佳久 (2012)「日中に懸ける—東亜同文書院の群像—」、中日新聞社。230-231。

<sup>4</sup> そのような状況下、愛知大学東亜同文書院記念センターは 2006~2010 年度に文部科学省の「オープン・リサーチ・センター」プロジェクトに採択され、全国の関係ある都市での書院に関する公開講演、展示開催とともに書院研究を本格化させることが出来た。2006 年、横浜から始まった毎年の公開講演は、アメリカ・シカゴのアジア学会での招待を含め、今日まで 20 都市に及んでいる。また 2012 年度から 2017 年度のにかけては文部科学省の高度化推進事業に採択され、より研究を中心に推進することが出来た。それらの成果は当センター機関誌「同文書院記念報」(年報)に収録され、現在 27 号を数え、別冊も刊行され収録されている。そのほか叢書

やブックレットなども刊行中である。

<sup>5</sup> たとえば、Douglas R. Reynolds with Carol T. Reynolds(2014)“East Meets East—Chinese Discover the Modern World in Japan, 1854—1898—”,ASSOCIATION FOR ASIAN STUDIES,INC. 715p。

ポール シンクレア (2018)「東亜同文書院とアメリカ海外貿易研究所とのカリキュラム上の相似について」(A Toa Dobun Shoin Look alike ? The Development of Tri-Partite Curriculum at the American Institute of Foreign Trade )、「同文書院記念報」、Vol.26。別冊、29-50。

<sup>6</sup> 佐々博雄 (1989)「日清貿易商会構想と日清貿易研究所」、「アジアの教育と文化」所収、巖南堂書店刊。

汪 輝 (1998)「日清戦争前の対清人材教育—荒尾精と上海日清貿易研究所—」、「広島東洋史学報」、第 3 号、72-78。

向野康江 (2014)「日清貿易研究所における学生生活—向野堅一の兄たちの書館を手掛りに—」、「アジア教育史研究」、No.23、25-49。

木村明史 (2017)「日清貿易研究所創立期の教育構想」、「総合歴史教育」、第 51 号、79-91。

石田卓生 (2019)「東亜同文書院の教育に関する多面的研究」、不二出版、500p。

<sup>7</sup> 角山榮 (1984)「明治初期、海外における日本商

社及び日本人」、「近畿大学商経学叢」、79号、315-345。

村上勝彦(1992)「産業革命期の日中貿易一日清貿易研究所に寄せて」、「東京経大会誌」、No.174、68-95。

高嶋雅明(1979)「領事報告制度と「領事館報告」について」、「経済理論」(和歌山大学)、168号、62-85。

瀬岡誠(1989)「江商の企業者史的研究—藤井善助の社会化の過程—」、「彦根論叢」、258、259号、179-204。

瀬岡誠(1989)「企業者活動供給の源基—総合商社のルーツ—」、「滋賀大学経済学部附属史料館研究彙報」、第37号、143-166。

<sup>8</sup> 中村 義(1992)「アジア主義の系譜」、東京学芸大学紀要、第45集、215-229。

大里浩明(1999)「石川伍一のこと」、「人文研究」(神奈川大学)、No.135、69-126。

大里浩明(2007)「宗方小太郎日記」、「人文学研究所報」(神奈川大学)、40号、45-109。

大里浩明(2005)「漢口楽善堂の歴史(上)」、「人文研究」(神奈川大学)、59-87。

向野康江(2019)「日清貿易研究所と玄洋社関連の人々」、愛知大学東亜同文書院大学研究センター・ワークショップ用論文。1-10。

<sup>9</sup> 佐々博雄(1992)「熊本国権党系の実業振興策と対外活動—地域利益との関連を中心にして—」、「国士舘大学文学部人文学会紀要」、24号、43-58。

<sup>10</sup> 前掲注7の中の村上勝彦論文。

<sup>11</sup> 野口 武(2015)「「日清貿易研究所」研究の整理と課題—東亜同文書院前史としての位置づけと荒尾精に関連して—」、「同文書院記念報」Vol.23、69-89。

<sup>12</sup> 藤田佳久(1993)「「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」、「東亜同文書院大学と

愛知大学」、六甲出版、50-73。

<sup>13</sup> 井上雅二(1910)「巨人 荒尾精」、左久良書房、357p。

なお、1993年、村上武により、増補版の復刻と「荒尾精の今日的意義」の解説的一文を付加して、東光書院出版部から再刊されている。

<sup>14</sup> 愛知県枇杷島町の郷土史研究会による。

<sup>15</sup> 前掲注12による。p8。

<sup>16</sup> 前掲注13 10-12。

<sup>17</sup> 前掲注13 p13。

<sup>18</sup> 御幡雅文(1886)「華語き歩」上、下、前掲注6 358-364に詳しい。

<sup>19</sup> 前掲注13 p15。

<sup>20</sup> 草地 保 他編(1989)「岸田吟香伝」、旭町教育委員会刊、13-14。

<sup>21</sup> 藤田佳久(2017)「幕末期に上海を訪れた岸田吟香の行動空間とコミュニティー形成」、「同文書院記念報」、Vol.25、5-34。

藤田佳久(2018)「上海を初めて日本人に切り開いた青年藩士たちと岸田吟香」、「同文書院記念報」、Vol.27、115-130。

なお、このあと、再度上海へ渡り、上海楽善堂を開店させた以降の岸田吟香については、劉燕妮(2016)「甲申事変以前における上海楽善堂の性格について—岸田吟香の対清策の分析を中心に—」、「明治大学大学院文学研究科、文学研究論集」、第44号がある。但し、興亜会からの影響や清国への見方は、論証が必要だと思われる。

<sup>22</sup> たとえば、大林靖(1940)「荒尾精」(4膜5場)、「中央演劇」12月号では長崎芝居小屋での荒尾精の演説会での反対者と激しい議論、日清貿易研究所が迎える初正月での留守を守る根津一の反対者との対応、若王寺に届いた教え子たちの戦死情報を知った荒尾の苦悩、台湾での紳商協定を地元側と話し合うときの暴漢乱入シーンと日清貿易研究所を去った生徒の一人との対

面など、荒尾の波瀾万丈のアクシデントが生々しく演じられるシナリオである。日中戦争が始まった初期の時期における荒尾精の上演の背景には、日本のアジア政策への国民の理解を求めようとするまだ穏やかなテキストとして利用されたように見える。

<sup>23</sup> 注 7 の高嶋雅明論文。

<sup>24</sup> 藤田佳久 (1995) 『『清国通商綜覧』(1892 刊) とそこに描かれた清国末期の地域像—東亜同文書院の中国研究(その 1)—、「国際問題研究所紀要」(愛知大学)、103 号。

<sup>25</sup> 注 8 のうち、石川伍一の日記についての大里報告。

また、メンバーについては、畑中ひろこ (1988) 「漢口楽善堂の人々—大陸浪人の源流—」、明治大学大学院紀要、第 25 集 (3)、329-341。

<sup>26</sup> 日清貿易研究所編 (1892) 「清国通商綜覧」、全 3 冊、発売丸善商社書店。

<sup>27</sup> 荒尾精 (1889) 「復命書」、ここでは「対支回顧録」所収分を利用。

<sup>28</sup> 伏敵門畔 清漣野生編述 (1909) 「荒尾精氏日清貿易談」、「博多青年須読 完」、1-31 枚。

<sup>29</sup> (演劇シナリオ)。

<sup>30</sup> 前掲注 13 p49。

<sup>31</sup> 富田啓一郎 (2017) 「大正デモクラシーと鳥居素川評伝」、熊本出版文化会館刊。p60。

<sup>32</sup> 前掲注 31 67-68。

<sup>33</sup> 前掲注 31 69-85 の日記部分。

<sup>34</sup> 田中孝治 (2018) 「東亜同文書院と清代末の中国固有の簿記」、「同文書院記念報」Vol.26、51-84。

なお、戸谷将義 (2019) 「清末中国における複式簿記用語の形成—楊汝梅(予戒)による下野直太郎「簿記整理」の翻訳とその影響—」、「愛知論叢」(愛知大学大学院院生協議会)、第 106 号、131-154、は 20 世紀初期の清末に日本の簿記テキストが清国語に翻訳され、「貸方」、「借方」などの

用語が清語の中に定着した事などを明らかにした。これが田中孝治の清国での書院の清国簿記との関係の検討に発展すると面白そうである。

<sup>35</sup> 黒木 文 (2005) 「港亜会のアジア主義」、「九大法制研究」、71-4、615-655。

佐藤三郎 (1951) 「興亜会に関する一考察」、「山形大学人文科学」、第 1 号、1-14。

<sup>36</sup> 済々黻百年氏編纂委員会 (1982) 「済々黻百年史」、28-33。

<sup>37</sup> 前掲注 36 35-46。なお、創設期の状況は創設者で校長の佐々友房による『済々黻歴史』が収録されている (71-87)。

<sup>38</sup> 佐々博雄 (1988) 「教育勅語成立期における在野思想の一考察—熊本紫雲会 of 教育、宗教道徳観を中心として—」、「国士舘大学文学部人文学会紀要」、第 20 号。37-57。

佐々博雄 (1992) 「熊本国権党の実業振興策と対外活動—地域利益との関連を中心として—」、「国士舘大学文学部人文学会紀要」、第 24 号、43-58。

<sup>39</sup> 三角町史編纂協議会専門委員会 (1987) 「三角町史—三角港築港百年記念事業—」、575-583。

<sup>40</sup> 佐々博雄 (1980) 「清仏戦争と上海東洋学館の設立」、「国士舘大学文学部人文学会紀要」、第 12 号、55-76。

熟 美保子 (2008) 「上海東洋学館と「興亜」意識の変化—杉田定一を中心に—」、「経済史研究」、第 12 号、137-156。

熟美保子 (2010) 「明治 17 年における上海の日本人街—亜細亜学館設立をめぐる—」、「経済史研究」第 14 号、シンポジウム報告、167-173。

ここでは簡潔に、東洋学館が亜細亜学館に名称を変え、語学中心のカリキュラムへ変更したあと、現地上海領事が学校の存続意向へ変化していくものの、日本政府が廃止するに至った経緯を紹介している。タイトルの「日本人街」は「日

本人」だけにした方が良いと思われる。

また、瀬岡誠（1989）「総合商社の企業者史的研究—コスモポリタネス—」、「彦根論叢」、260、261号、165-187.は岸田吟香、荒尾精の人脈を踏まえ、東洋学館の設立も瀬岡の視点である人脈、集団との関係で触れている。

<sup>41</sup> 前掲注 40 のうち熟論文、p146。

<sup>42</sup> 前掲注 26。

<sup>43</sup> 前掲注 26 第1編、953-954。

<sup>44</sup> 前掲注 26 第1編、p957。

<sup>45</sup> 前掲注 26 第Ⅱ編、1-600、+3。

<sup>46</sup> 前掲注 26 第1編、959-1059。

<sup>47</sup> 前掲注 26 第1編、地、1-665。

<sup>48</sup> 前掲注 26 第1編、天、地、第Ⅱ編、全。

<sup>49</sup> 荒尾精は、日本が清国に勝利し事で、国内に生じた領土分割や賠償金要求の世論に対し、それは清国の勢いを止め、欧米やロシアの清国へのさらなる浸食を促し、日清間の提携をつぶすものとして反対した（荒尾精（1894）「対清意見」。博文堂、106p）。

しかし、この意見に対して多くの批判が出たた

め、それに対してあらためて、清国は東アジアにとって大事な国であり、領土分割や賠償金の要求は清国を分解させるだけで、清国の国民への過度な課税で国民は疲弊してしまう。そのことの利害を日本は国家百年の計で考えるべきであり、日本国民は私利、私欲に走らず、産業を興し、貿易で立国する事の方で覚悟を決めるべきだと、意見を開陳した（荒尾精（1895）「対清弁妄」、大谷甚平ら3名の発行者、96p）

なお、前掲注 12 の村上武刊行書に、この両書が収録されている。

<sup>50</sup> 前掲注 8 の大里浩明「宗方小太郎日記」。

<sup>51</sup> 前掲注 26 第1編、天、923-958。

<sup>52</sup> 野口武（2016）「日清貿易研究所出身者の「立身」と教育機会（2）」、「愛知大学国際問題研究所紀要」、148号、37-69。

野口武（2016）「日清貿易研究所生一覧表の作成と『対支回顧録』編纂を巡る若干の考察」、OCASIONAL PAPER、5、1-20。